

情報・メディア・ネットワーク社会

竹島 尚仁

はじめに

我々の社会はますます情報と切り離されがたく結びつくようになっている。日本の情報化は1970年以降大きく展開してきた。「新刊情報」「新譜情報」「天気情報」「道路交通情報」「株価情報」「為替情報」「地価情報」「情報科学」「情報家電」「情報機器」「住宅情報」「情報公開制度」「情報機器」「情報産業」……。「情報」とつくことばが氾濫している。これだけみても社会における情報の比重の重さが分かる。もちろん現代社会において、はじめて情報の重要性が認められ、情報は力である、ということが認知されたわけではない。国家統治、戦争、商業、交通、等々——古くからある社会現象も情報伝達によって成功や失敗が生じたことは歴史に明らかである。むしろ我々の社会は、情報は力であるということを誰もが認識しはじめた社会であると言った方がよいだろう。「情報が物資やエネルギーと同等あるいはそれ以上の重要な資源となり、その価値を中心に社会・経済が発展していく」¹情報化社会の成立が、我々の認識や実感にも支えられていることは疑いない。

情報があらゆる時代において重要であったことが理解されれば、われわれの社会が情報化社会であると言っても、情報の流れを加速したメディアの特性が、情報の内容に劣らず重要であることが分かる。さまざまなメディアの開発によって、そしてメディアのパーソナル化によって、個人が受信・発信する情報量がはるかに増大するのである。情報が個人の手に届くようになり、個人が発揮できる潜在的な力がますます高まったと言える。

この論文では、情報を取り扱う際の倫理的側面や、いわゆるインターネット規制や知的所有権などの法的側面ではなく、個人や社会のあり方がメディアの発達によってどのように変容されるのかを取上げたい。しかし、ひとくちに情報化社会といっても、多様な情報と多様なメディアが氾濫するなかで、情報とは何か、という点がわからない。さらに情報化社会のあり方を変容させるメディアとは何かもわからない。そこで、まず「情

¹ 知恵蔵1997「情報化社会」の項。

報とは何か」「メディアとは何か」を改めて見直しておくことは無駄ではないだろう。厳めしく言えば、情報とメディアの存在論を考えてみるのである（1. と 2.）。そしてメディアが人と人とのコミュニケーションに及ぼす影響を考え、メディアと人間との関わりを考える（3.）。そのうえで、——現在コンピュータネットワークによる電子メディア革命が始まったばかりで推測を述べるしかないが——ネットワーク社会において起こりつつある変化をどう特徴づけたらいいかを展望してみたい（4.）。

1. 情報とは何か——データと情報と知識

情報の定義は実にさまざまであるが、代表的なものに、情報とは「物質－エネルギーの時間的・空間的及び質的・量的なパタン」²である、という定義がある。たとえば、「X銀行は倒産するらしい」と音声で伝達する場合を考えてみよう。それが大声であろうと小声であろうと、またきんきん声であろうと低くゆったりした声であろうと、その音声伝える情報（すなわちその内容）には変わりがない。音声波の振動が時間的に変動するとき、その振動パターンがある一定のパターンに収まるかぎり、その内容には変わりがない。あるいは、同じ発言を紙切れに大きく書いても小さく書いても、また上手な字でも下手な字でも書いても、紙から反射される光が、空間的に一定のパターンを描くかぎり、文字が伝える情報（すなわちその内容）には変りがない。蛇足ながら、声で表現しようと文字で表現しようと伝えられる情報には変わりがない³。

もちろん声で伝えられる情報は、声が表す内容ばかりではなく、今述べた声の調子、言い換えれば声そのものがもつ情報もある。小声でひそひそ言うほど、その発言の真実味は増す。同じく文字が伝える情報は、また文字が書きなぐられたように歪み激しい調子で書かれたことを思わせるものなら、その文字は書いた人の興奮が並大抵のものでないことを思わせるであろう。

このように、肝心の情報に付随して必ず伝達されてしまう情報もある。これを付帯的な（あるいは偶有的な）情報と呼んでおこう。付帯的な情報は、情報が物質性ととともにしか存在し得ないことから生じる。それが肝心の情報の伝達にとってどれほど重要であるかは、見過ごされてはならない。ある人が客観的に大切な内容を述べていても、吠え

² 吉田(1990) 255. なお「量的」と言われる側面は、情報科学（情報・通信工学）において、「情報量」として分析される側面であり、これに対して「質的」と言われる側面は、情報の進化段階や情報の機能等々の側面を表し、吉田の唱える「情報科学の構想」において分析される側面である。

³ 事柄を分かりやすく説明したものとして飯尾(1998) 35を参照した。

るようにしゃべれば、相手は内容よりもしゃべり方に強く反応する。付帯的な情報が肝心の情報の伝達を妨げる。だからといって付帯的な情報をとりはらうことが目標とされてはならない。そもそもそれをとりはらえば、肝心の情報も存在しなくなるのだから、それはできない相談である。したがって肝心の情報をいかに伝えるかを考えなくてはならない。それは付帯的な情報をいかにコントロールするかにかかっている。発声する人のタイプ、声の抑揚、声量、間の取り方、等々。映像情報の伝達について言えば、カメラワーク、ビデオテープの切り取り方、等々。これらはみな、メディア・リテラシーが分析対象とする領域に含まれる⁴。

ともあれ、情報は、時間的変化や空間的配置のパターンとして存在するがゆえに、物質やエネルギーを必ず必要とする。物質やエネルギーを離れた情報は存在しない⁵。言い換えれば情報は「メディア」を離れては存在し得ないのである。これについては次節で見ることにして、我々が情報をどのように取り扱うかを見ておこう。それによって情報がどのような存在であるかがよりはっきりするからである。

情報を取り扱う仕方は3通りある。それは伝達、処理、蓄積である。このこと考えるために、視覚情報を獲得しそれを伝達する（おおまかな）過程を例にとってみよう。物質—物質による光の反射—視覚刺激—視野—言語あるいは記憶像—音声・文字あるいは絵。まず情報は人間に知覚されなくてはならない。赤い花の表面が光を反射し視覚を刺激する。そこで赤い花のある視野が構成される。一部の情報は言語（「この花は赤い」）や抽象的な記憶像（赤い花の像）によって保存され蓄積される。蓄積された情報が、そのままあるいは加工されて、他者に伝達される。

この情報経路のいずれのポイントから次のポイントへも情報の伝達が起こっている。そして伝達が起こるときには、つねに何らかの処理がなされている。たとえば、物質のあり方が光の反射パターンに変換され、それがまた、情報の部分的な欠落はあるものの、視覚刺激のパターンに変換される。そこから得られた視覚像は、その大部分の情報が捨てられ言語に変換処理され、蓄積される。情報の蓄積もまた、情報経路のどのポイント

⁴ メディア・リテラシーとは、「市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力」、あるいは「そのような力を獲得をめざす取り組み」（鈴木(1998) 8)を指す。このように、メディア・リテラシーは実践的な志向の強い研究であるから、まずもって目的論的に定義される。しかしその分析は、メディアがもたらす付帯情報を取り込んだ情報全体に向けられている。

⁵ 吉田(1990)は、アリストテレスの〈質料—形相〉というカテゴリー・セットを念頭に置いて、物質及びエネルギーは哲学的な「質料」概念を科学化したものであり、情報は哲学的な「形相」概念を科学化したものであると位置づける。

においても生じている。たとえば、言語だけが情報を蓄積するのではなく、物質の情報は光の反射パターンに蓄積され、視覚刺激のパターンにも蓄積されている。

今見たように情報の経路ということが成り立つなら、伝達・処理・蓄積、どれにおいても、常に同一の情報が存在していなくてはならない⁶。もしそうでないと、情報は伝達されることがなく、伝達されない情報は情報でなくなってしまう。「伝達される」ということは、情報にとって最も基本的なことだからである。つまり「情報伝達ということがもともと〔同一情報の〕コピーなのである」⁷（〔 〕内引用者の挿入）。さらに「処理する」ということも、「蓄積する」ということも、コピーであり、ともに伝達の一種であるということも言いうる。

ある段階の加工処理を中心に見たとき、加工以前の素材としてデータがあり、加工処理後のものとして情報がある。たとえば、「この花は赤い」という言語化された情報以前に、それを表す視野があり、また、「ある花が白い」という言語化された情報を他から得ていた場合は、これと統合されて、「花には赤いものもあれば白いものもある」という知識が形成される。知覚システムによって構成された視野情報が言語システムへ加工処理される仕方は、同一の情報を異なるメディアに変換するものだと考えられる。これに対して、異なる情報を統合化し知識を形成するという処理は、単なる情報のコピーではなく、処理自体が特有の価値をもつ。先の例の場合は、さほどほめられた知識形成を示してはいないが、高度な学問的知識はきわだった創造的価値を示す。

このように処理の特徴の相違から、情報と知識との違いを考えることができる。広義の情報は次のように三分されることが多い。①素材としての「データ」、②データが加工されて何かに役立つようになったものとしての「情報」（狭義の情報）、③それがさらに体系的に仕上げられたものとしての「知識」⁸。すると、前段で述べた最初の方の処理は、①から②への処理であり、知識形成処理は、②から③への処理である。

さて、最初の処理は伝達と密接な関わりがあるが、知識形成に関わる処理は伝達よりはむしろ蓄積に密接な関わりがあると言えると思う。つまり、情報が伝達されるということに重きをおいた情報であるのに対して、知識は蓄積されるということに重きをおいた情報である。これが情報と知識との違いである。たしかにこの違いは原理的な違いで

⁶ 厳密に言えば、伝達の前後で完全に同一の情報というのは理想に過ぎないかもしれない。人と人との情報のやり取りでも、情報にはなんらかの解釈が入り込む可能性があるし、同じ CD でも、CD プレーヤーによって再生音が全然違うのは周知のとおりである。

⁷ 飯尾(1998) 43

⁸ 飯尾(1998) 34

あるとは言えないが、我々がそれらに対してとる態度の違いにはっきりと現れている。それを情報と知識のもつ、構造、新しさ、確実性の面から見ておこう。

情報は、構造的に単純であり、他の情報との関連なしで伝えられる。天気予報、株価、テレビに出る速報などはその最たるものだ。つまり情報は流されるためにあると言ってもよい。これに対して、知識は構造的に複雑であり、情報や情報を更に加工したものが相互に論理的な関係を保ち、秩序ある連関を示す。数学や哲学など学問が難しいのはこのためだ。知識は、流されるよりもデータベースとして利用価値の高い資源であろう。もちろん知識も情報として流されることはある。大学での講義などもそうだ。しかしたとえば百科事典やなにか哲学書が流されたとしても、たいてい見向きもされないだろう。受け手は自分が必要になったときそれらの知識にアクセスできればそれで十分なのである。

情報は時間が経つと古くなりすぐ捨てられることが多い。情報は事件の発生から時間が経てばたつほど価値がなくなる。天気予報、株価情報、為替レートなどはそうである。何よりも受け手にとっての新しさが重要である。単に奇をてらったものであろうと、科学上の新発見であろうと、情報が受け手にとって新鮮であることはそれだけで価値である。もちろんその情報が重要でなく興味深いものでなければ捨てられる。こうした意味で、情報は伝達を目的としたものであると言えよう。これに対して知識はどうだろうか。やはり知識は我々の経験を集約した、(比較的)永続的な価値をもつ。したがって知識は古くなっても古さゆえに研究される面もある。知識に新しさは必ずしも求められない。知識は、誰もがアクセスできるように蓄積されたリファレンスであり、我々の思考の出発点となるべきものである。

情報はデマや間違った情報の可能性もあるとみなされる。ニュースは、その新しさが優先され、その確実さが犠牲にされることもある。それゆえ我々が情報の信頼性を疑問に思うときには、情報源(新聞社、出版社、発信者、等々)を突き止めようとするのだ。なるほど情報源は、時間をかけて社会的な信頼を獲得する。しかし我々は、情報をうけとるとき、それを確かかどうか定めなくてはならないものだとは基本的に考えている。同様に知識にも、情報源の信頼性に相当する権威というものが存在する。それは執筆者、編集者、出版社などの社会的地位や評価を通じて与えられている。その評価はまた、多数の学習者や批判者の評価をくぐり抜けて獲得されたものである。したがって知識はまず確実なものであろうと想定して受け取る。それゆえまた、ある知識を最終的に評価しないにせよ、結論をくだすには十分な熟慮が必要だ。というのは知識が、私的な経験を超えた普遍性をもち、時間を超えた経験を伝えるものだと考えられているからだ。それだけに我々は知識をなかなか捨てようとせず、むしろこれを保守したり、何らかのかた

ちで延命させようとする。

以上情報とは何かを見てきたが、この節を終えるにあたって、哲学と情報科学の接点は意外にも深いことに触れておこう。哲学は、データ—情報—知識というプロセスに関する問題を認識論として考察してきた。情報の信頼性や知識の確実性も哲学の主題であった。データの加工や知識形成処理は、概念や判断や推理がどのように成立するかという哲学的問題と関わっており、また知識全体がどのような性質をもつかも哲学が説明しようとしてきたことである⁹。

さらに、情報あるいは知識をもとにどのようなリアリティが構成されるのかについても、この問題を存在論として考察してきた。たとえば哲学は、一切の加工に先立つデータが存在するのかを問う。さきにデータと呼んだものは、通常加工済みの別情報である。そこでデータとしてあらゆる加工を受ける以前の、なまのデータが想定されるが、その存在を正当化することはなかなか難しい。たとえば、ヘーゲルは対象の認識に関してつぎのような趣旨の主張を行う。認識能力が対象を加工するものとみなす場合はもちろんのこと、対象を全く加工しないとみなした場合も、対象そのものの認識は成立しない。こうなるのは、そもそも対象と認識能力を分断したうえで、両者を関係づけようとするからである。これに対してヘーゲルは、対象も認識能力も両者の関係の場のなかで初めて成立するものだと考えるのである¹⁰。

2. 情報とメディア

以上情報がどのような存在であるかを見た。情報は処理・伝達・蓄積され、知識に比べて単純な構造、新しさ、場合によって不確実さをそなえたものであった。そしてメディアは情報にとって不可欠な物理的存在であると言えた。この節では、このメディアが情報の伝達・蓄積・処理をどのように高めてきたかを見てみよう。その際、人と人との間でやり取りされる情報の社会的伝達¹¹を中心として見ていきたい。

⁹ 基本的に哲学のアプローチは科学的なアプローチから区別される。というのは哲学は概念化と概念分析が基本であり、科学は物理過程の分析が基本だからである。したがって、物質が光を反射し一定の空間的パターンを形づくり、それが視覚を刺激するという物理的な過程が、ある認識を生み出すという説明は、それ自体科学的知識をもとに組み立てられたものであって、哲学的にはその正当化がさらに要求される。

¹⁰ GW9. 53f. 認識能力だけをまず吟味しようとして、それを道具(Werkzeug)または媒体(Medium)と見なすならば、対象(絶対者)の認識はどちらの場合にも成立しないとヘーゲルは論じる。

¹¹ 情報の流れは、人から人へ(記号による社会的情報の伝達)の伝達のほかに、物から人へ(知

まず、メディアによって伝えられる情報には基本的な形態があると考えておくのがよい。ある人が別の人に情報を伝達するなら、受け手はその情報を知覚できなくてはならない。受け手に情報が知覚されるには、音や言語情報、図像情報が、①音や音声、②文字、③静止画、④動画として、すなわち音や光のパターンとしてメディアによって提示されなくてはならない¹²。

これら4形態の情報を担うメディアと言え、新聞、雑誌、書籍、レコード、カセットテープ、CD、フロッピーディスク、などが思い浮かぶ。しかしこれら4つの情報形態も、マクルーハン流にそれ自体メディアと捉えることができる¹³。前節でみたように、情報はつねにメディアとともに存在するからだ。ともあれ、ここでメディアは人と人との間で情報を伝達するものというものを念頭に置いておこう¹⁴。

さらに音波、電気、電波、光もまたメディアである。これが奇異に聞こえるのは、前段のメディアが情報を蓄積するものであるのに対し、これらが情報を伝達するものだと思われているからである。なるほどそれは確かだが、両者はともに情報を蓄積し伝達するのであり、両者の区別はあくまで程度の差であるにすぎない。つまりメディアの物理的な特性によって、より蓄積向きであったり、伝達向きであったりするだけである。た

覚情報の伝達)、人から物へ(操作記号の伝達)、物から物へ(神経情報・遺伝情報・装置内情報の伝達)という伝達経路がある。これについては飯尾(1998) 38fを参照。

¹² これらに対して、臭覚、触覚、味覚に対応するメディアは発達してこなかった。臭覚メディアにあたるのは人間の汗などの分泌物である。触覚は人間の身体(表面)そのものがメディアである。触覚情報は伝達距離がかぎられるから、非常にパーソナルなコミュニケーションに向く。しかしここに来て、生地の手触りをネットに接続している人に、特殊な端末を用いて伝える試みがなされているとも聞く。また、気象衛星からの最新データをもとに、衛星の進行速度に合わせた地表の画像と、赤外線画像から生成した温度データを与えたプレートとをリンクさせ、手のひらを通じて世界の温度が感じられようにした企画もある。<http://www.sensorium.org/index-j.html>を参照。味覚については、他の人に同じ物を食べるように勧めて伝えるしかない。

¹³ マクルーハンは文字がメディアであることを強調する。周知のように、彼はメディアを人間の拡張とみなした。馬車、自動車は足の拡張であり、衣服は皮膚の拡張であり、武器は歯の拡張であり、電子メディアは中枢神経組織の拡張なのである。マクルーハン(1964)を参照。

¹⁴ マス・メディアと言え、それは新聞社や放送局を指すが、ここで「メディア」は物理的な存在に限定して用いているので、これらの社会組織は除外される。また、ここに挙げたようなメディア以外にいろいろなものをメディアに含めて考える論者もいる。学校、劇場など、発信者と受信者の相互コミュニケーションが行われる空間的場を、メディアとみなす論者もいる。これについては井上(1998) 54fを参照。また、さらに包括的なメディア概念を提示するのは中野収である。彼によれば、「ものみなメディア」である。洋服、ピアスなどに見られるファッションや都市そのものも含め、メッセージを発信するものすべてをメディアと見なす。これについては中野(1997) 74ffを参照。

例えば紙メディアは、粘土板・石板・金属板とくらべて簡単に燃えてしまうが、かさばらずより軽いため、蓄積性よりも伝達性を重視したものと言える。しかし紙の伝達性もそれを運ぶ交通手段（人、馬、自動車、等々）の速力が基本的に上限となる。これに対して音波、電気、電波、光というメディアは、エネルギーを保てないとすぐ消失してしまうが遠くに到達するから、蓄積性を犠牲にして伝達性を高めることができる。これで人間は、交通手段の速力を超える情報の伝達手段を手にしたわけだ。いうまでもなく音波に比べてあとの3つは圧倒的に伝達性が高い。

メディアが情報の蓄積に及ぼす影響は、①蓄積時間、②蓄積密度の観点から見られる。蓄積は情報が時間のなかで消失するのを押しとどめ、時間への依存度を減らす。もちろんメディアのなかで蘇生した情報の寿命はメディアの物理的な耐久性に左右される。メディアに耐久性があればあるほどよい¹⁵。しかし、情報がある物質に蓄積される以上、かならず空間のどこかを占める。メディアの伝達性を考えると、占める空間は狭い程よく、なおかつ大量の情報が蓄積できればよい。そこでメディアの記録密度をあげ、また電流、電波、光の周波数をあげるのである。

メディアが情報の伝達に及ぼす影響は、①伝達速度、②伝達量、③情報の忠実性（情報のロスがない、あるいは雑音が入り込まない）、④伝達される人数、という観点から整理できる。伝達は情報が発生した空間への依存性を減らす。情報が発生したのと同じ空間にとどまれば、それは伝達されないことと同じである。そして情報の伝達性はメディアの伝達性に依存する。メディアの伝達性はつねに時間に依存するから、伝達性をあげるには伝達時間が短い程よいわけだ。飛脚や伝書鳩より電子メールである。

このように情報の伝達性と蓄積性を高めるために、伝達と蓄積とを一体化させていたメディア（たとえば紙）から、両方の機能を分化させ、より伝達向きのメディア（電気、電波、光）とより蓄積向きのメディア（たとえばカセットテープ、CD、HD）とをつくりあげてきたと言える。人間がメディアを発達させてきた方向は、できるだけ速く、大量に、正確に、多くの人に、というものであった。

このように情報の伝達力・蓄積力が向上しても、情報の処理はどうだろうか。音や音声、文字、静止画、動画がデジタル化（簡単にいえば符号化）されるに及んで、どの形態の情報も同じように扱えるようになったことは見逃せない。マルチメディアの技術的

¹⁵ もちろん情報の蓄積を最大の目的とした場合である。メディアを資源と捉えるなら、紙に描かれたインクが消えてまたもとの紙にもどるほうがよい。これは、加藤(1991) 99によるアイデア。カセットテープ、フロッピーやハードディスクは、磁性体がもつかり、情報を消去して再生が可能だ。

なバックボーンはここにある。カセットテープは音（音声）に特化し、書籍は文字に特化していたが、音や文字のデジタル化によってたとえば CD 上に両方の情報を入れることができる。それゆえ CD はカセットテープと書籍という別々のメディアを融合しているように見えるわけである。

ともあれデジタル化によって、情報の伝達や蓄積は圧倒的に容易になった。そして情報をコピーしたり¹⁶、定型的な情報処理技術は発達してきたと言える。たとえば画像を電波に変換する処理や情報分類・検索などの方法は知られている。しかし人間がこれまで行ってきた活動——たとえば、視覚刺激から視野を構成する、言葉を学習する、絵画や音楽をつくる、ある理論を形づくる、など——のプロセスは解明途上であり、情報処理は創造的な処理であればあるほど、処理技術の確立は困難であるようだ。ある論文をコンピュータにかけたら、ちゃんとした要約が出てくるようになれば、どんなにすばらしいことだろう。

3. 人間とメディア

マクルーハンは、メディアの中身、すなわち情報ではなく、メディアに注目せよと言った。というのもメディアが情報の流れを変え、したがって人を変え、人と人のコミュニケーションのあり方、したがって組織や社会を変えるからだ。人間同士のコミュニケーションを考える際、＜人—人＞という情報の直接的な流れが減少し、＜人—……メディア……—人＞というメディアを介した情報の間接的な流れが増大している。そのとき前者が本来的で、後者が非本来的であるという図式が描かれる¹⁷。しかしどこまで本当だろうか。

人から人への情報の流れは直接的であり、一対一の直接的情報交換がコミュニケーションの理想形態であるとも考えられる。しかし情報がメディアを離れては存在しない以上、人から人へという情報の流れも、人—メディア（音声や文字）—人という情報の流れでしかない。したがって、メディアを介したコミュニケーションが音声を介したコミュニケーションに劣る理由はない。

¹⁶ 周知のように、このため知的所有権の問題が大きくクローズアップされる。ただ情報をコピーすることはそれ自体悪いことではない。ソフトウェア会社は、情報のコピーを禁じられれば、当然ながら存続し得ない。また健全な社会生活を送るうえで有用な情報を、多数の人が簡単に共有できるようになったメリットも大きい。

¹⁷ 中野はこれを近代のイデオロギーであると言う。中野(1997) 148.

対面での音声によるコミュニケーションが全体的で包括的であるのは、音声の伝達に必要な距離が短いゆえに、音声以外に人間の身体が発するさまざまな情報（表情、身振り、手振り等々）を全体として受け止められるからである。このためにしばしば人と人との対話が、人間のコミュニケーションの基本であると考えられるのである。しかしその理由は、音声を使うからではなく、言ってみれば全人格的な情報を交換できるからである。もし初対面の相手がサングラスをかけていたなら、不安になり、余計な気をつかいながら発言しつづけるだろう。したがって、人と人とのコミュニケーションが直接的（対面の場合）か間接的（いわゆるメディアを介する場合）かという区別は、厳密に言って重要な区別ではない。むしろコミュニケーションが、伝達される情報の質と量の点から見て部分的か全体的かという区別が重要なのである。

したがって、いわゆる直接的コミュニケーションに対して間接的コミュニケーションが劣る理由があるとすれば、後方で用いられるメディアが我々の感覚の一つを強調し、他の感覚を捨象し沈黙させるという効果があるためである¹⁸。たとえば電話は音声以外の情報を切り捨て、聴覚だけを刺激する。そこに電話への耽溺が生じる理由がある。そして自分が、あるいは相手が声だけの存在と化したかのような錯覚まで生じることがある¹⁹。また同じ理由から、逆に電話嫌いのひともでてくる。電話の音声だけが突出し他の情報が得られないため、メッセージの解釈に不安を覚えるからだ。

そしてメディアが自己を完全にさらけ出さず、自己をガードするメディアとして用いられることも確かだ²⁰。面と向かって話せないことも電話では話せたりする。しかし自己をガードすること自体にも、そしてその手段としてメディアを用いること自体にも問題はない。その過剰さが問題なのだ。「自己のガードを完全に下げなさい」ということを守れる人などこの世には存在し得ない。

また、メディアを介したコミュニケーションが直接的なコミュニケーションより有利な点があることも見逃すわけにはいかない。電話の方が話の内容に集中できる人は少なくない。また、場合によって直接的なコミュニケーションが煩わしいこともあるから、その場合には要件だけ伝えられれば好都合である。その意味でファックス、電子メール、ボイス・メールは便利である。しかも、電話と違って受け手が送信時にいなくても情報を送れるので相手に迷惑をかけなくてすむ。

¹⁸ これも、メディアの作用に注目すべきことを主張したマクルーハンの考えの一部である。

¹⁹ 大澤(1995) 49ff.

²⁰ 中野(1997) 307.

結局のところは、直接的なコミュニケーションと間接的コミュニケーションの使い分け、つまり人間との直接的接触と間接的接触との比率をどう考えるかの問題である。メディアがコミュニケーションを間接的にするがゆえにそれを歪めると即断するのは誤りである。人間関係が互いに何かを知ることによって成り立つなら、メディアのないところに社会は存立し得ないからである。メディアによって間接的コミュニケーションが行われ、我々の社会認識は広がり豊かになる²¹。この面を否定することは不可能だろう。世界規模の環境問題が身近なものとして考えられるのも、メディアがあればこそである。

4. ネットワーク社会——本・新聞・テレビ・ホームページ

前節では人間とメディアの関わりを見てきた。さてここではさまざまなメディアが浸透しつつある社会に目を移そう。現在、電話やラジオ・テレビによって切り開かれた情報化社会を大きく転換させつつあるのは、パーソナルコンピュータである。パソコンがネットで接続されることで、コンピュータは、単独でソフトウェアを用いて文書作成、経理、データベース構築に役立てるという役割のみならず、ネットワークに接続するための情報端末としての役割を高めている²²。1992年に海外の低価格パソコンが日本市場で認知されるようになり、その後インターネットプロバイダーの急増を見て、ほとんど誰もが自分のパソコンを世界中のパソコンとつなげるようになった。パソコンのネットワーク、すなわちインターネットに接続することによって、我々個人に何をもたらすか——この点をマクルーハンを手がかりに考えてみよう。

マクルーハンは、「メディア(medium)は人間の拡張(extension)である」、「メディアはメッセージである」などのテーゼや、「ホットなメディアとクールなメディア」、「地球村(the global village)」²³などの概念装置を提出し、ラジオやテレビの時代にあって、地球規模の同時コミュニケーションの現実性を明敏に感じ取っていた。

マクルーハンは、ある言葉の概念を他の言葉で精密に定義するよりは、むしろその概念が表す具体的な現象や多彩な引用を散りばめていくというスタイルをとる。そのため彼の考えをまとめようとするとは多少符牒的なものになってしまうが、自分なりに言葉を

²¹ 中野(1997) 129.

²² もちろん、コンピュータをはじめとするインターネット接続端末が、各家庭にどれほど浸透するかによって、ネットワーク社会の全体像は変わってくる。そしてこの浸透の度合いは、まず経済力に左右される。

²³ McLuhan(1964)

補いながらまとめてみたい。

マクルーハンは独特の文明史観をもつ。それは、①部族的な口誦文化、②表音アルファベットによって形づくられた西欧の文字文化・機械文明、③電気メディア（ラジオ・テレビ）が切り開きつつある文化、というように3つに分けると考えやすい。彼にとって、音声も文字も、電気メディアと同じく、文明を特徴づけるメディアである。①の段階では、音声メディアは、「継ぎ目のない親族関係と相互依存の網の目をもった部族」²⁴内の情緒的な人間関係と親和性がある。思うに、音声メディアは、届く範囲が限られるがゆえに、他人との距離を縮めるはたらきをする。

しかし文字メディアは、このような濃密な人間関係から人間を解き放ち、個人を自立させる。おそらく、文字メディアは、濃密な人間関係をつくりあげていた共通の知的財産を個人の外部に蓄積し、そして個人からそれを遠ざけることを可能にするからだろう。その結果その財産をあらためて個人に注入するために、教育が必要とされたわけである。また文字メディアは、情報を伝えるために送り手と受け手が同じ時間にしかも同じ場所に存在する必要性をなくしてしまい、人間相互の社会的な距離を広げることになるからだろう。さらに、専門家と一般人との差は書きことばのリテラシーにもとづくからだろう。この傾向を加速させたのがグーテンベルクの印刷術である。そして印刷された文字は、自然の構造を詳細に分析・分類し機械文化を作り上げ、また近代国家が「中心-周縁」構造のなかで政治的統一を実現するのに貢献したと言う。

電気メディアは、この文字文化の様相を一変させる。電気メディアは情報の流通を加速し地球を隅々まで満たす。「我々の文明は「中心-周縁」という構造をもち、専門化し細分化しているが、それがいま突然に、あらゆる機械化された部分を有機的全体に瞬間的に再編成するという経験をしている。これが地球村という新しい世界なのだ」²⁵。ここでは周縁を中心化するという欲求は働かず、いたるところに中心が生れ周縁は消滅する。そして彼はこう予測する。「自分たちが人類社会の他の人たちと全面的に相互依存の関係にあることを情緒的に自覚した、複雑な、深い構造をもった人間に、着実かつ急速に変っていくであろうということだ」²⁶。そして人間の「独自性や多様性は、電氣的状況においてはじめて育てることが可能になる」²⁷。

マクルーハンの文明史観をどう評価するかはさておき、最後の発言は、われわれがネ

²⁴ McLuhan(1964) 50.

²⁵ McLuhan(1964) 93.

²⁶ McLuhan(1964) 50-51.

²⁷ McLuhan(1964) 316.

ットワーク社会に期待するもの²⁸と一致する。このネットワーク社会をもう少し具体的に考えるうえで、マクルーハンの書物と新聞とテレビの対比は非常に興味深く、そのヒントになる。続いて、その対比を踏まえホームページのあり方を考えてみよう。ホームページは、個人が世界に向けて自己表現することを可能にしており、そこにこそネットワーク社会の意味がもっとも明瞭に映し出されていることに気づくであろう。

書物は、一貫した、私的で単一の視点にもとづいて、素材が集められたのちふるいにかけられ、分析され、そしてまとまりを与えられ章立てされる。書物は「ひとつの視点を備えた個人的な告白形態」²⁹である。それが私的な関心にもとづく以上、他者の関心とおのずと違って来る。仮に同じ素材を集めたとしても、同一の書物が出来上がることはまずない。

これに対して新聞はどうだろうか。今我々が手にする新聞を見ても、政治・経済・社会・国際・株価・家庭・趣味・ラジオ・テレビ・スポーツ・文化・地域・多種多様な広告、それに加えて読者の主張——雑多な内容に何かひとつの一貫した視点を見出そうとしても思い付かない³⁰。「明確な視点が最初から放棄されている」³¹。しかしそれこそが、本と異なる新聞の本質なのである。新聞は、「人間の表現や経験の墮落した形態」³²ではない。マクルーハンは新聞独自の形式を「モザイク形式」と捉える。すなわち新聞は「多様な情報を並列して日々社会へ暴露すること」³³なのである。それゆえ新聞のモザイク形式は、共同体の一員であることを自覚するという効用をもつ。「モザイク的手段によって、新聞は共同体のイメージ、あるいは断面図に仕立て上げられる」³⁴。「モザイク形式は人間の共同社会の支配的な特徴となった。なぜならモザイク形式は、超然とした「視点」ではなく、過程への参加を意味するからだ。それゆえに、新聞は民主的な方式と切り離せない」³⁵。民主主義の本質は、程度の差はあれ、さまざまなレベルの意思決定や関心の過程に参加することにある。新聞が送り届ける情報のすべてが参加の出発点となる。さら

²⁸ これを「個人の自由を拡大しながら組織・集団の安定がもたらされる」「フレキシブル社会」(井上(1998)2.)と言うこともできよう。

²⁹ McLuhan(1964) 204.

³⁰ もちろん、いろんな新聞の編集方針や傾向などがあることは確かだが、ここでは新聞というメディア一般のもつ特性を考えている。

³¹ McLuhan(1964) 203-204.

³² McLuhan(1964) 210.

³³ McLuhan(1964) 204.

³⁴ McLuhan(1964) 212.

³⁵ McLuhan(1964) 210.

に言えば、新聞が毎日送られてくることも、共同体存続のイメージをかたちづくるという効果をもつ³⁶。

電気メディアであるテレビはどうか。テレビは新聞のモザイク形式を引き継ぐ。テレビは、——現在では多少言い過ぎかもしれないが——「ほとんど行き当たりばったりにかき集められたデータの統一的全体」³⁷だからである。新聞と同様、多種多様な意見や関心事が流されている。したがってテレビもまた視聴者の参加の度合いが高いメディアである³⁸と言われる。思うに新聞とは違った仕方で共同体のイメージを喚起すると言えるだろう。一秒も途切れることのない電波が、共同体存続のイメージを意識されないほどに浸透させると言えはしないだろうか。

マクルーハンが電気メディアが世界を村の規模に縮小する³⁹と述べて以来20年以上たった現在では、衛星通信によって世界中の映像やニュースが届けられ、テレビによる人間同士の統一感は増している。スポーツなどの中継をみるとき、その同時性ゆえに臨場感が高まりテレビの向こうとこちらの一体感を容易に感じることができる。

しかしラジオにせよテレビにせよ、電気メディアが地球村をつくりあげるのだとしても、地球村の統一性は世界の人と同時に同じものを耳にするという可能性（現実性ではなく）にしかない。その意味で、今なお進化を続けるネットワークも、WWW(World Wide Web)が出来上がるまでは地球村の統一の可能性でしかなかった。というのは、いくらコンピュータネットワークが世界をひとつにしていると言っても、情報の流通は限られた人によって限られた範囲のなかで行われたにすぎなかった。もちろん組織や地域の境界を越えて、その外部の人と電子メールによってコミュニケーションできたという点だけでも、ネットワークの意味は十分にある。しかしそれでも、ラジオやテレビとおなじくネット

³⁶ McLuhan(1964) 212.

³⁷ McLuhan(1964) 317.

³⁸ ここで新聞とテレビとの比較は、ホットなメディアかクールなメディアの区別に関係なく行っている。マクルーハンによれば、新聞・ラジオはホットなメディア（他に印刷物・映画）であり、テレビはクールなメディア（他に電話）である。ラジオは勉強しながら聞くことができるし、書物や新聞は音楽を聞きながらでも読むことができるのに対して、テレビや電話はそういうことができずメディアに集中することを求める。つまり前者は複数の感覚を動員させる必要がないが、後者はそれを必要とするというのである。言い換えれば前者は、受け手の参与の度合いが小さく、後者はそれが大きいということになる。ただしこの区別には異論も多い。また、テレビが「視覚的メディアというより、むしろ触覚＝聴覚的メディアであって、我々のすべての感覚を深層の相互作用に関与させる」(McLuhan(1964) 336)という興味深い把握は、さらに検討が必要だ。

³⁹ とりわけラジオメディアの効果として強調された。

ワークは、個人が世界に直接能動的に参加する機会を与えたわけではなかった。しかしネットワークに個人が参加する大きなきっかけは WWW の登場であると思う。WWW の登場が、ネットワークへの参加の大きな動機づけとなった。なぜだろうか。それは、WWW が地球村の統一性を形づくる機会を実際に世界中の諸個人のもとに届けるからである。より正確に言えば、個人が、実際に自由に世界に接続し世界を見て回り、そして自己表現することが可能になったからである。

インターネットの活用は、現実社会の活動をネット上に移すことから始まった。葉書や手紙に対して電子メール、顔を突き合わせて行う会議や討論に対してメーリングリストやテレビ会議、張り紙やボードに対して電子掲示板、ラジオやテレビ放送に対してインターネット放送（たとえば Realnetworks によるもの）をとという具合だ。WWW 上でリンクされたホームページは個人の発信を可能にした。これはなるほど言い古されたことだ。しかし重要なのは、ホームページを出すことが、世界のなかの一個人としてネットワーク社会に住民登録しそして住民としての活動を行うことになるということだ。この点において、地球村の統一性は個人の能動性によって形づくられるものとなっている。もちろん検索ページを通じてアクセスされなければ、現実的に住民として承認されたことにならないかもしれない。しかし現実社会でも新しい出会いがそうそうないように、アクセスが少ないことをそう嘆く必要はないだろう。ともあれホームページは、相互にアドレスを知らないとメールを送れない電子メールやメーリングリストとは全く別の役割を果たしている。

さて、WWW を全体としてイメージしたとき、そこには新聞という限られた紙面では盛り込めなかった多種多様な意見と関心に彩られたホームページ群がたち現れる。それぞれのホームページの活用の仕方は実にさまざまである。行政によって公開された情報を一般の人が直接見られる。国会での質疑応答も見られる。政党の政策公開も詳細にでき、政策案に対して判断材料をリンクさせて提示しながら賛否の投票を行える。移り変わる気象衛星ひまわりの映像を見たり、商品の詳細な性能比較および最新価格、料理のレシピ、おすすめのレストラン、洗剤や食品添加物、環境問題、エネルギー問題など知りたい情報がかなり容易に手に入る。従来のメディアを通しては実現しにくかった、共通の関心をもつ人たち（たとえば高齢者、子育てに迷う主婦ら）のネットワークも、つくりあげることが容易になる。また自分史を公開することも容易だ。世界の名画を見せてくれるホームページもある。

これらを内容によって分類する試みもなされている。たとえば実用型、参加型、表現

型、娯楽型という、4つの傾向性によって分けてみるのもいいだろう⁴⁰。しかし全体としてのホームページ群について言えることは、それが提供する内容が私的なものであろうと公共的なものであろうと、全体としてまさにモザイク形式をとるということである。ホームページ群は編集方針も紙面の制約もない新聞のようなものだ。これが、「独自性と多様性」をもった地球村の統一性のあり方だろう。

マクルーハンは、すでに見たとおり、電気メディアが情報の伝達を加速させることによって、均質で画一的な世界がつくられると考えたわけではない。つくられるのは独自性と多様性が育まれる世界である。実際、自己表現への欲求がましている⁴¹。自分の声、自分の写真、自分の筆跡、自分の日記、自分の趣味、自分の仕事、自分の家族、「自分の～」と言えるものはなんでもホームページに載せることができる。このようなホームページはくだらないという意見がある。それに対して、このような態度は、本志向の人が新聞やテレビに対する態度と同じものであると、マクルーハン流に批評できるだろう。つまり何らかの明確で一貫した視点を期待する方が間違っている。くだらないと思う人はそういうページを見なければいい、ただそれだけのことである。ホームページは、公共性の高いものから私性の高いものまで多種多様な内容を包含する、公共的なメディアなのである。その意味でネットワークはひとつの社会であり、さまざまな欲求と関心が並存する場所である。

しかしホームページは、ややもすると、社会の共同性を強めるのではなく、社会を分散化する方向に力を貸すことも考えられる。ここで考えたいのは、発信するホームページの内容の特殊性（私性）から生じるものではなく、ホームページの通信形式の本質からでてくる傾向である。そしてその傾向は、ホームページを見る（受信する）場合に認められる。そもそもホームページの通信形式は、一対多ではなく、一対一である⁴²。発信する側にたてば、実際多数の人が自分のホームページを訪れてくれれば結果的に一対多の関係が成立することになる。しかし受信する側に立つと、あくまで受信するホームページはひとつであり、一対一の関係が生じるにすぎない。新聞やテレビは多様なものを最初から読者に送りつける。しかしホームページは最初から多様なものを受信者に送り付けるのではなく、検索ページを使って自分がターゲットとなるホームページを探さなくてはならない。誰もが自分の関心——公共的なものであろうと私的なものであろうと

⁴⁰ http://www.nhk.or.jp/yuyu/list/list_top.html#chart

⁴¹ 朝日新聞（1998年8月30日）には、文章を「書きたがる」人が増えている、との記事が見られる。

⁴² 岩谷(1998) 91.

——にしたがって行きたいホームページを選択する。そしてそのリンク集（ブックマーク集）を手元にもつ。そして技術的にもこの傾向が支えられるようになった。最近になってサーチエンジン（ホームページを検索するためのホームページ）Yahoo! Japan が My Yahoo! という仕組みをつくった。自分の関心にあった情報ネットを構築するためである。

しかしながら、これもまたモザイク的な新聞やテレビの特質に見合うものだ。多様な読者や視聴者を想定した紙面や番組編成は、あらゆる人に見られることを意図してはいない。つまりあくまで多様な受信者がいることを想定している。多様な受信者の総体が社会の姿である。これまでのマスメディアからこぼれがちだった個人の特殊な関心が、ネットワークという公共的なメディアに登場し、発信情報の裾野を広げた。それに対応して受信者も多様化する。実社会のあり方が、新聞やテレビ以上にすみずみまで露呈してきてだけのことである。もちろんネットワーク社会がばら色だと言うつもりは毛頭ない。なぜなら現実の社会がばら色でないからである。

おわりに

ネットワークはそれだけで自生できる社会ではない。ネットワークの内外がうまくかみ合ってひとつの社会が出来上がるはずであり、そこにネットワークの意味がある。しかしネットワークを流れる情報や従来のマスメディアを通じて流れる情報量と伝達速度の増大は、我々に大きな影響を及ぼしている。人間の処理速度の限界、すなわち人間の知覚処理と言語理解の速度に限界があるからだ。ただし限界を超えたのは情報化社会になってからということはない⁴³。それでも情報の流通量・速度が、人間心理に対して圧迫感をましていることは確かである。このような状況のもとで、いやがおうでも誰もが大量の情報から選択することを迫られる。

そのために、情報の量と速度の拡大は、個人のグローバル化（地球規模の情報化）のみならず、ローカル化（小集団内部での情報の共有化）をも押し進める。ローカル化は、特定の集団や地域社会の情報を増やし、それらを活性化する面をもつが、同時に特定の集団や地域の枠を超えた情報も増える。つまり特殊な関心をもとでのみ集まり得た集団内での情報交換がもっと増える。たとえば、遠く離れた小学校の間で自由研究の発表会を行ったり、人材情報を集約したり、さまざまなボランティア、ゲームマニア、写真愛好家、不登校の人、いろいろな人が従来の枠組みを超えてコミュニケーション可能な場

⁴³ 中野は大衆新聞の登場以来生じている事態だと見ている。中野(1997) 273.

を作り出すことができる。しかし、すべての集団にも属するなどそもそも不可能だ。個人のローカル化は当然である。したがって、前節に見たように、個人のパーソナル化（私的な関心のもとで私的な世界を構築すること）をも押し進める。

この論文では、このような情報化の過程を、情報の内容ではなく、マクルーハンになって、メディアおよびコンピュータネットワーク自体が切り開く可能性に即して考察した。もちろん、ネットワークを利用した悪質な嫌がらせや詐欺など、必ずしもいいことばかりではない。しかし、インターネットに接続するたびに、それが、世界に接続しているのだという、非常にあやふやで抽象的だがいたって明瞭な観念が、人間の必ずしも強くない想像力を助け、個人がこの世界の一員であることの自覚を高めることになることを期待したい。——地球村の統一性に、非常にリアルな感覚を与えてくれるホームページがある。それは、世界各地の画像を、ほぼリアルタイムで届けてくれる⁴⁴。たとえばニューヨークのブルックリン橋の眺望。まさに、私の視覚が世界に張り巡らされ、地球のすみずみと一体化しているという感覚だ。イースト・リバーの空気が私の身体を包み込む。

参考文献

- 朝日現代用語・知恵蔵1997、東京：朝日新聞社、1997年
飯尾要、『情報・システム論入門』、東京：日本評論社、1998年
井上宏、『現代メディアとコミュニケーション』、京都：世界思想社、1998年
岩谷宏、『インターネットの大錯誤』、東京：筑摩書房、1998年
大澤真幸、『電子メディア論 身体のメディア的変容』、東京：新曜社、1995年
岡満男・山口功二・渡辺武達編、『メディア学の現在〔改訂版〕』、京都：世界思想社、1997年
加藤尚武、『環境倫理学のすすめ』、東京：丸善、1991年
J・カラン／M・グレヴィッチ編、『マスメディアと社会』、東京：頸草書房、1995年
桜井哲夫、『TV 魔法のメディア』、東京：筑摩書房、1994年
鈴木みどり編、『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、京都：世界思想社、1997年
高木晴夫・木嶋恭一・出口弘ほか、『マルチメディア時代の人間と社会——ポリエージェント・ソサエティー——』、東京：日科技連出版社、1995年
立花隆、『インターネットはグローバル・ブレイン』、東京：講談社、1997年
Hegel, G.W.F., *Phänomenologie des Geistes*, Hamburg: Felix Meiner, 1988. (GW9= *Gesammelte Werke* Bd.9)
McLuhan, Marshall H., *Understanding Media—the Extension of Man*, 1997, Routledge (First Edition 1964).
(邦訳『メディア論』、東京：みすず書房、1987年)

⁴⁴ <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/hiroshi1/cam.htm>

松岡正剛監修、『情報文化の学校——ネットワーク社会のルール・ロール・ツール』、東京：N T T 出版、1998年

守弘仁志他、『情報化のなかの＜私＞』、東京：福村出版、1996年

中野収、『メディア人間』、東京：頸草書房、1997年

仲本秀四郎、『情報を考える』、東京：丸善、1993年

Nelson, Ted, “A Brief Look at McLuhan’s Theories”, <http://hoshi.cic.sfu.ca/~guay/Paradigm/McLuhan.html>

村井純、『インターネットⅡ』、東京：岩波書店、1998年

吉田民人、「自己組織性と情報・情報処理」、『情報と自己組織性の理論』（東京：新曜社、1990年）
所収

（日本学術振興会特別研究員）